

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第34集

HEBIDUKA
蛇塚B遺跡III

長野県佐久市大字新子田蛇塚B遺跡群蛇塚B遺跡III

1995. 3

寿住宅株式会社
佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第34集

HEBIDUKA
蛇塚 B 遺跡 III

長野県佐久市大字新子田蛇塚 B 遺跡群蛇塚 B 遺跡 III

1995. 3

寿住宅株式会社
佐久市教育委員会



蛇塚遺跡Ⅱを上空から（上方が北）、右手の住宅団地は伊勢林住宅団地である。下方に農林水産省長野種畜牧場が広がる。

例 言

- 1 本書は、平成6年度に発掘調査を実施した長野県大宇新子田蛇塚B遺跡群蛇塚B遺跡Ⅲの発掘調査報告書である。整理作業・報告書刊行も平成6年度に行った。
- 2 本調査は宅地造成事業に関わり、寿住宅株式会社から委託を受け、佐久市教育委員会が実施した。
- 3 遺跡の所在地
佐久市大宇新子田1906-1、1906-2、1906-3
- 4 調査期間および面積
開発面積——3,204㎡
試堀調査——430㎡
平成6年7月4・7～9日
発掘調査——2,176㎡
平成6年8月17日～10月11日
整理作業・報告書刊行
平成7年1月～3月
- 5 本書掲載図の作成は、岩崎重子、小山内玲子、小幡弘子、小林百合子、小林よしみ、佐藤志げ子、林英智子、柳沢豊志子が担当し、執筆、編集は林幸彦が行った。
- 6 本書および関係資料等は、佐久市教育委員会で保管している。

本調査に際し寿住宅株式会社からは、多大なご協力をいただきました。記して感謝を申し上げます。

凡 例

- 1 挿図・遺物写真の縮尺は、次のとおりである。
遺構 1/80 1/40 遺物 1/4 遺物写真 約1/4
- 2 遺構の海拔標高は各遺構ごとに統一し、水系標高を記した。
- 3 土層の色調は、1988年版『新版 標準土色帖』に基づいた。

4 挿図中におけるスクリーン・トーンは、以下のことを示す。

<遺構>



地山断面



床下埋土



貼床



カマド構築土



焼土

<遺物>



須恵器断面

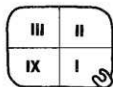


黒色処理



施軸範囲

5 竪穴住居址は、便宜上下図のように4分割して覆土中の遺物の取り上げ等を行った。



6 挿図の方位は真北を指す。

目 次

巻頭図版

例 言

凡 例

目 次

I 調査の概要

1 調査の経緯と経過

2 調査と体制

3 遺跡の位置と周辺遺跡

II 遺構と遺物

I 調査の概要

1 調査の経緯と経過

蛇塚 B 遺跡群は、湯川の右岸の台地上にあって標高700m~715mを測り、南北800m 東西500mの規模である。この台地には浅間火山灰土(P1)が堆積しており、台地の東側には顕著な田切り地形が見られる。県道下仁田浅科線を境界にして北側には蛇塚 A 遺跡群、また、南西には野馬窟遺跡群が存在する。本調査地点の西300mには、野馬窟古墳がある。本遺跡群は、1979年に長野県営住宅佐久市伊勢林団地建設に伴い蛇塚 B 遺跡群蛇塚 B 遺跡 I が、1983年に長野県営住宅佐久市伊勢林団地建設に伴い蛇塚 B 遺跡群蛇塚 B 遺跡 II、1984年には株式会社サンエス電気製作所長野工場の工場増設に関わり蛇塚 B 遺跡群野馬久保遺跡の発掘調査が行われている。1991年には与志本林業株式会社の宅地造成に伴い野馬久保遺跡が発掘調査されている。

今回、寿住宅株式会社が宅地造成を行うことになった。試掘調査を平成6年7月に実施したところ、トレンチ内から5軒の竪穴住居址が検出された。再三の保護協議がもたれたが、記録保存のための緊急発掘調査を実施することとなった。調査は、寿住宅株式会社から委託を受けた佐久市教育委員会が実施した。



第1図 蛇塚 B 遺跡群位置図 (1 : 50,000)

2 調査の体制

◎調査受託者 教育長 大井季夫

◎事務局

教育次長	奥原秀雄						
埋蔵文化財課 課長	戸塚 満						
管理係 係長	谷津恭子	田村和広	上原 希				
埋蔵文化財係 係長	草間芳行	林 幸彦	三石宗一	須藤隆司	小林真寿	羽毛田卓也	
	富沢一明	上原 学					
調査主任	佐々木宗昭 森泉かよ子						
調査員	岩崎重子	小山内瑤子	小幡弘子	小林百合子	小林よしみ		
	桜井牧子	佐藤志げ子	林 美智子	真輪保子	柳沢豊志子		

3 遺跡の位置と周辺遺跡

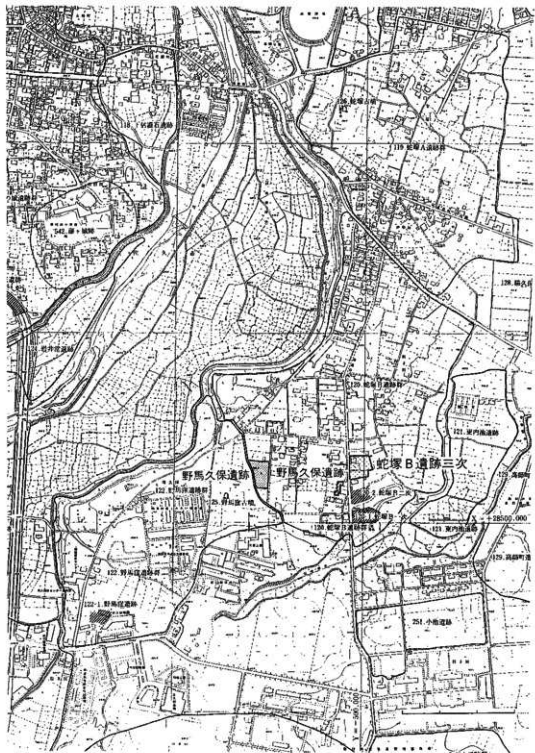
蛇塚 B 遺跡群の所在する台地は、上平尾の平根小学校から紅雲台団地を縦て農林水産省長野種畜牧場の北側さらに私立佐久幼稚園にまで伸びる南北3.3kmの細長い台地である。この台地上で本遺跡群に隣接する周辺の遺跡としては、北の蛇塚 A 遺跡群および蛇塚古墳と南西の野馬窟遺跡群および野馬窟古墳がある。本調査地点の北方900mの蛇塚 A 遺跡群内では、本年度に古墳時代後期 1 軒と平安時代 1 軒の竪穴住居址、新発見の終末期古墳 1 基が発掘調査されている。本調査地点の南西800mの野馬窟遺跡群内で1981年度に野馬窟遺跡が発掘調査され、弥生時代後期前半の竪穴住居址 2 軒が検出されている。

本遺跡群内では、今回調査地点の南に隣接した長野県営佐久市伊勢林団地造成地内で1979年に第 1 次調査が、1983年に第 2 次調査がそれぞれ実施されている。第 1 次調査では平安時代の竪穴住居址 5 軒、第 2 次調査では平安時代の竪穴住居址が16軒が検出されている。さらに、県道香坂・中込線を挟んだ西側に近接した株式会社サンエス電気製作所長野工場内では、工場増築に伴い平安時代の竪穴住居址 2 軒が発掘調査され、3 軒が存在を確認されている。調査された 1 軒はベッド状遺構を伴うものであった。3 調査地点からは多くの黒書土器が出土している。また、その200m 西側地点と志本林業株式会社の宅地造成地内では、平安時代の竪穴住居址 1 軒などが検出されている。

このように、周辺遺跡群では弥生時代後期や古墳時代後期の竪穴住居址が検出されているものの、本遺跡群内で検出されているのは、いまのところ平安時代の竪穴住居址群だけである。



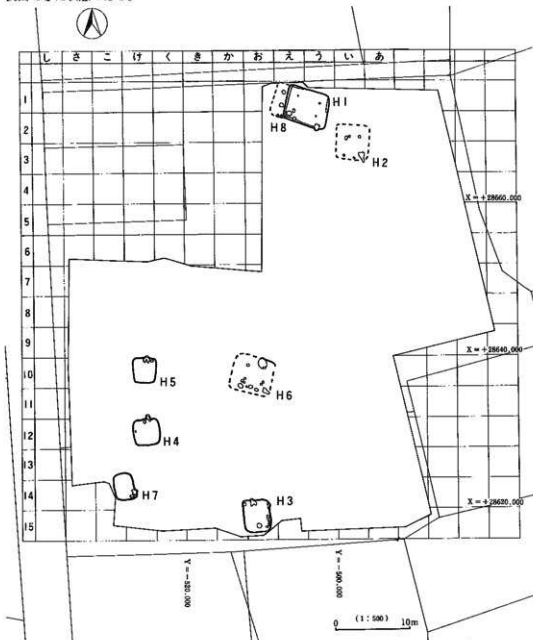
第2図 蛇塚B遺跡Ⅲおよび蛇塚B遺跡Ⅰ・蛇塚B遺跡Ⅱ・野馬久保遺跡調査全体図(1:1,000)



第3回 蛇塚B遺跡IIIと周辺遺跡 (1 : 10,000)

II 遺構と遺物

現在存在する家屋を除いた調査対象地内からは、平安時代の住居址が8軒検出された。耕作土から遺構確認面まで20~30cmと非常に浅いため、H2・H6・H8号住居址はかろうじて床面が検出できた状態である。

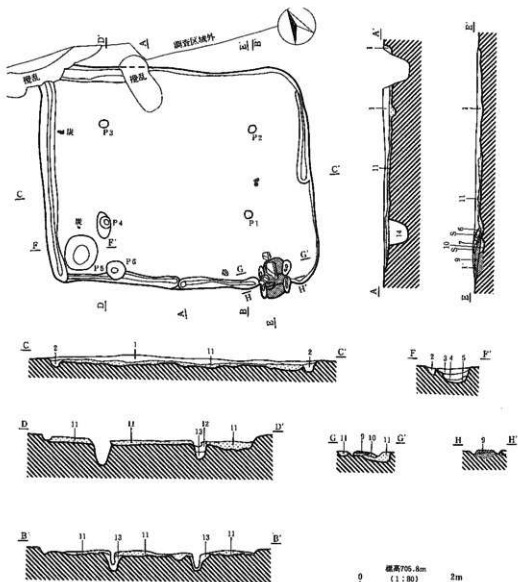


第4図 鉦塚B遺跡田調査全体図 (1:500)

1 H1号住居址

本住居址は、調査対象地内の北端う・えー1・2グリッドで検出された。住居址西側はH8号住居址と重複し、H8号住居址を破壊している。

平面形態は、南北4.6m 東西5.7mのやや隅が丸みを帯びる長方形を呈する。表土が浅く耕作



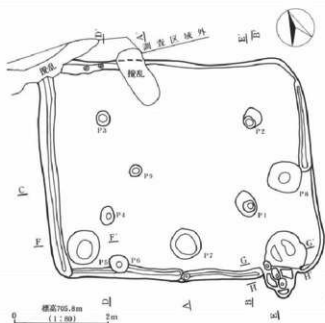
第5図 H1号住居址実測図

土が浅間火山灰土(P1)にまで及んでおり遺存状況は悪い。そのため壁残高は、4-10cmと浅い。カマドを中心とした南北軸方向は、S-15°-Wを指す。床面は壁直下を除き全体に壁敷であった。床面下の掘り方は、ほぼ均一で約10cm程で、暗褐色土で埋めている。ピットは6個が検出された。支柱穴P1・P2・P3・P4が長辺3.2m短辺1.0mの長方形状に平面形態に相似形で配されている。深さは、39.5・38・29・49cmを測る。P1・P2・P3には径18cm~20cmの柱痕が確認された。南西隅から検出されたP5は径75cm深さ35.5cmを測り、須恵器甕が出土した。貯蔵穴であろうか。床面下からは、P7・P8・P9の3個のピットが新たに検出された。壁溝は南壁・西壁下および北壁・東壁の一部に確認できた。幅14~26cm深さ5~8cmを測る。カマドは、南壁の東端に設置されていた。使用時の状況はなく壊れた状態であった。火床および燃焼部底面は、約8cmの焼土がみられさらに、地山にも焼け込みが及んでいた。火床上部に熔結凝灰岩が3個みられたが、カマドの構築材と思われる。南壁中央付近にも3個の熔結凝灰岩の小片が散布していた。火床の下部の褐色土は、カマド構築土である。両袖部にあたる位置には左右2個ずつの細長いピットがあり、袖部の芯材に礫が使用されていたことが窺える。

出土遺物には、土師器杯・高台付碗^{cm}・羽釜、須恵器蓋・甕がある。図示した3点は、カマド内へ出土した。出土遺物が少なく明確ではないが、羽釜の存在、南壁にカマドがあることから10世紀後半代に位置づけられようか。



写真1 H11号住居址(南方から)



第6図 H1号住居址掘り方実測図

- 1層 黒褐色土 (7.5YR3/1) 炭と焼土を含む。
- 2層 褐色土 (10YR4/6)
- 3層 黒褐色土 (7.5YR2/2) 焼土ブロックと炭を含む。
- 4層 濃い褐色土 (7.5YR5/4) 焼土を含む。須恵器土。
- 5層 褐色土 (7.5YR4/4)
- 6層 黒色土 (7.5YR2/1) 炭と焼土ブロックを多量に含む。
- 7層 黒色土 (5YR1.7/1) 炭。
- 8層 棕色土 (5YR6/8) 粘土。
- 9層 明赤褐色土 (5YR5/6) 焼土。
- 10層 褐色土 (10YR4/6) カット積層土。
- 11層 暗褐色土 (7.5YR3/4) 床下埋土。
- 12層 黒褐色土 (10YR2/3)
- 13層 褐色土 (10YR4/6)
- 14層 暗褐色土 (10YR3/4)



写真2 H1号住居址掘り方(南方から)



第7図 H1号住居址出土遺物実測図



写真3 H1号住居址カマド（西方から）



写真4 H1号住居址P5（東方から）

2 H2号住居址

本住居址は、いー2・3グリッド～検出された。H1号住居址同様に耕作土が浅間火山灰土にま

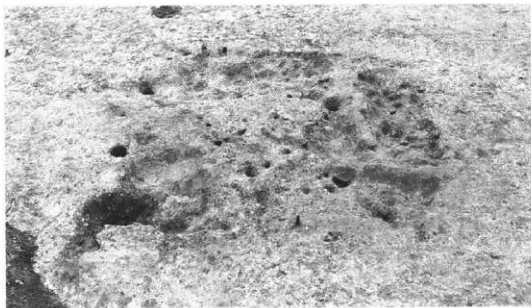
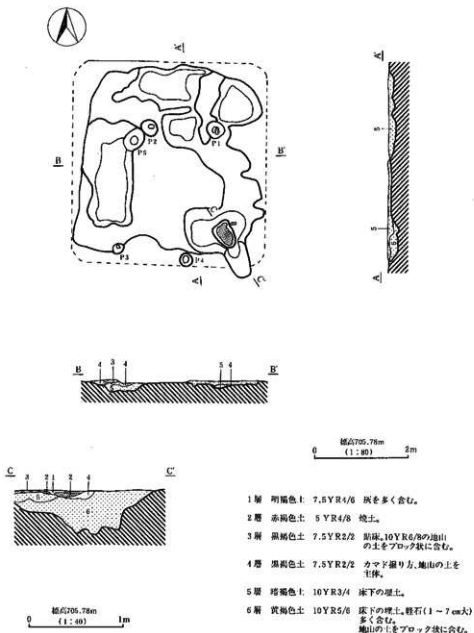


写真5 H2号住居址（東方から）

で達しているためカマド周辺のわずかな床面と掘り方の精査から遺構の範囲が把握できた。

推定の平面形態は1辺4mの正方形を呈すると思われる。南北軸方向は、Nを指す。

ピットは5個検出され、短辺1.4m長辺2.8mの長方形に配されているP1～P4が主柱穴とみられる。径26～36cm深さ29cm～48cmを測る。床下は暗褐色土と黄褐色土で埋められていた。



第8図 H2号住居址実測図

カマド付近の貼り床は、黒褐色土を叩き締めている。

カマドは掘り方の形状と焼土の検出状況から南東コーナーに設置されていたことが窺える。出土遺物は、わずかに土師器羽釜片が3点であった。

南東コーナーのカマドや羽釜の存在から、H1号住居址と時期を同じくするものであろう。

3 H3号住居址

本住居址は、調査対象地の南端のお・か-14・15グリッドから検出された。平面規模南北4.3m東西3.6m、平面形態は隅丸長方形を呈する。壁残高は20cm～40cmを測る。カマドを中心とした主軸方位はN-5°-Wを指す。床面は各壁直下を除き堅緻であった。床面下の掘り方は、II・III区が20cmと深いものの、全体は10cm前後と浅い掘り方である。掘り方には褐色土が埋められていた。ピットは3個検出され、いずれも柱穴と考えられる。P1とP2は双方とも住居内側に傾斜し壁を斜めにくり貫いている。P3の柱穴内埋め土上部は柱痕部を除いて、堅く叩き締められていた。P3は径南北64cm東西56cm深さ57cmを測る。カマドは北壁のやや西寄りに設置されていた。カマドは、予め掘られた住居の掘り方を褐色土で埋めた後芯材の焙結凝灰岩を粘土を含

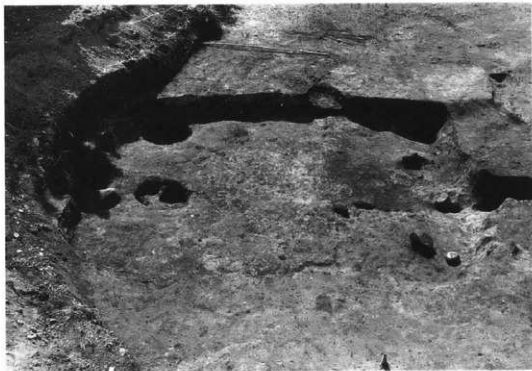
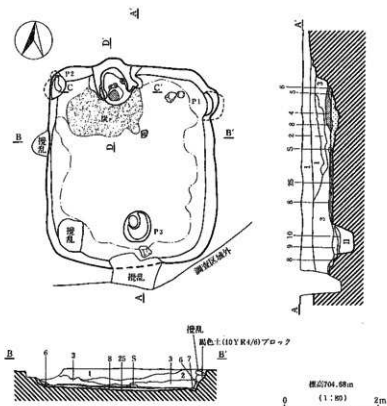


写真6 H3号住居址（東方から）



- 1層 雜作土
- 1層 黒褐色土 (10YR2/3)
- 2層 暗褐色土 (10YR3/4) 褐色土・暗褐色土を帯状・ブロック状に含む。
- 3層 暗褐色土 (10YR3/3) 明黄褐色土ブロックを含む。炭を少量含む。
- 4層 赤褐色土 (5YR4/6) 焼土・カマド構築土多く含む。炭多い。(カマド構築土の崩れ)
- 5層 黄褐色土 (10YR5/6)
- 6層 暗褐色土 (10YR3/3)
- 7層 黒色土 (10YR2/2) 本層下の床面は非常に堅固。
- 8層 黄褐色土 (10YR5/6) 兩壁寄りはやい。
- 9層 暗褐色土 (10YR2/3)
- 10層 褐色土 (10YR4/6)
- 11層 橙褐色土 (5YR6/6) 焼土・炭・灰を含む。(カマド構築土の崩れ)
- 12層 黒色土 (5YR1.7/1) 炭。堅い。
- 13層 褐色土 (10YR4/4) 黄褐色土ブロック・炭・焼土ブロック少量含む。
- 14層 褐色土 (7.5YR4/4) 灰・炭・焼土ブロック。強い。
- 15層 暗褐色土 (7.5YR3/2) 灰が主。炭・焼土ブロック少量含む。

第9圖 H号3住居址実測図



写真7 H3号住居址（北方から）

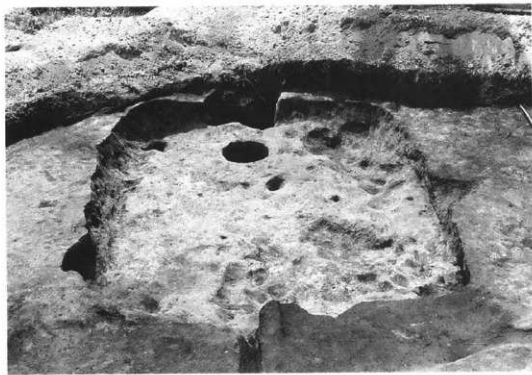
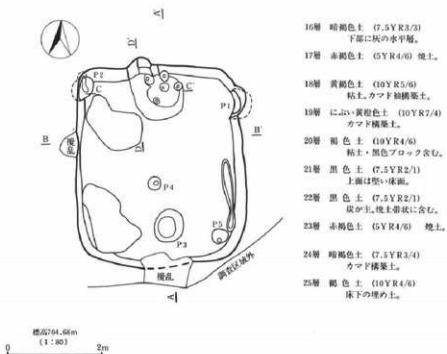


写真8 H3号住居址掘り方（北方から）



第10図 H3号住居址掘り方平面図

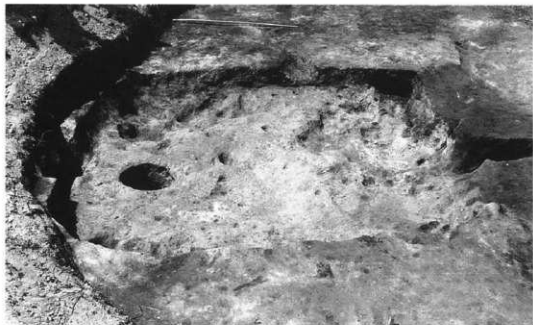
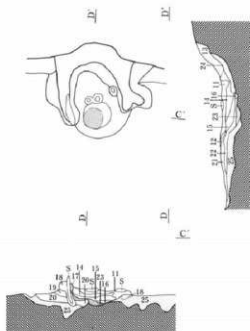


写真9 H3号住居址掘り方(北方から)



第11図 H3号住居址カマド実測図

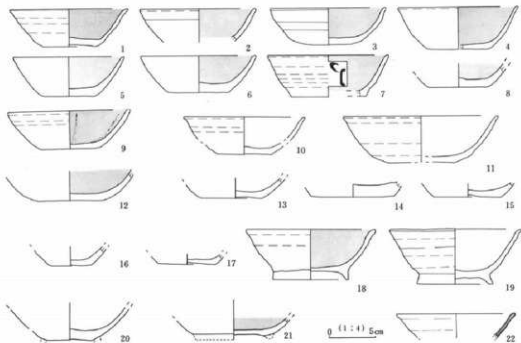
む黄褐色土やにぶい黄橙色土や褐色土で覆い構築されていた。これが窺えるのは左袖部のみである。燃焼部から煙道にかけての立ち上がり角度は暗褐色土を用いて調整している。火床には2個の小ビットがみえ、支脚石があったことが考えられる。火床の上面からカマドの前にかけて細かな炭が分布していた。カマドの構築材とみられる20cm～25cmの安山岩と熔結凝灰岩がカマド東脇・P1の西側P3と南壁の間にそれぞれ出土した。

床面下掘り方精査の段階で、ビットが2個と東壁中央から南壁にかけて壁溝が検出された。

出土遺物には、土師器杯・高台付碗・甕須恵器杯・甕、刀子、不用鉄製品、磨石が



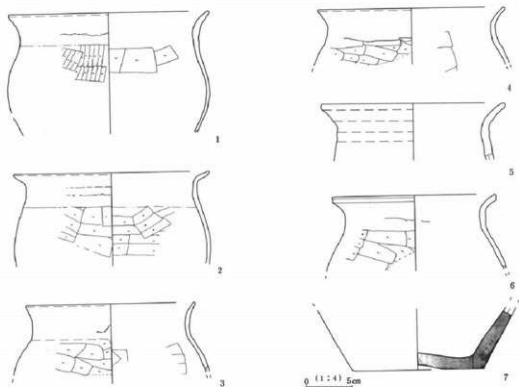
写真10 H3号住居址カマド(南方から)



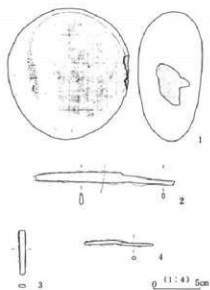
第12图 H3号住居址出土遗物实测图



写真11 H3号住居址出土遺物



第13圖 H3号住居址出土遺物実測図



第14圖 H3号住居址出土遺物実測図

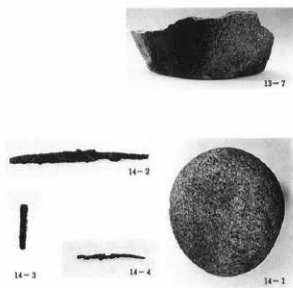


写真12 H3号住居址出土遺物

ある。土師器が主体で須恵器は図示した2点の他は、小片が5点みられただけである。

ほとんどのが覆土第1層内から出土した。第12図13・19が1区第1層、第12図7・11・14・17・第13図1・3・5・6が2区第1層、第12図2・5・8・9・21・22・第13図4が3区第1層、第12図4・6・18が4区第1層内から出土した。第12図16は4区の住居掘り方、第13図7がP2内から第12図3が南側の住居掘り方から出土した。第12図1は2区1層と4区1層出土片が、第12図10が1区1層とカマド掘り方出土片が、第12図12は4区住居掘り方と1区出土片が、第12図20が1区1層と4区1層出土片が、第13図2は2区1層と1区1層出土片が接合した。第14図1の磨石は1区P1そばの床面から、第14図2の刀子・3・4の鉄製品はカマド前面の床面から出土した。

土師器杯第12図1～17はすべて回転糸切りの低部を持つ。1～9・12が内面黒色研磨されている。第12図18～21は高台付壇で18と21が内面黒色研磨がなされている。7の杯体部には判読不明ではあるが墨書が認められる。

第13図1・2・3・4・6は土師器長胴甕でコの字状口縁をもつ。5は土師器長胴甕でロクロ整形により、他のコの字状口縁の甕とは、色調・焼成とも異なっている。

第14図1は安山岩の磨石で表面・裏面ともに掘り面がみられ、右側面中央には敲打痕もある。2は刀子で刃部と基端部を欠損する。4は紡錘車の軸であろうか。3は不明鉄器である。

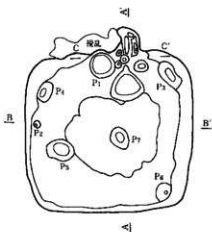
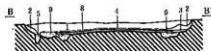
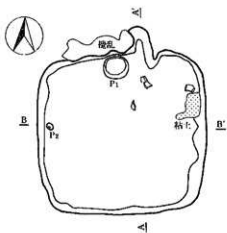
最大径が胴部上半にあるコの字状口縁土師器長胴甕、いわゆる北信濃型甕の存在、須恵器杯が希薄な存在で土師器杯が主体を占めている土器組成の特徴から、本住居址は平安時代（10世紀前半）よりは、遅らないといえよう。

4. H4号住居址

本住居址は、く・け-12グリッドから検出された。北壁の中央から西壁寄りを攪乱によって破壊されている。平面規模南北3.6m、東西3.46m 平面形態は隅丸方形を呈する。壁残高は、10cm～24cmを測る。カマドを中心とした主軸方位は、N-5°-Wを指す。床面は各壁直下を除き堅緻であった。床は褐色土と黒褐色土を堅く叩き占めた貼床である。床面下の掘り方は、中央を高く掘り残り壁寄りが深い掘りである。掘り方には地山のにぶい黄褐色のブロックを多く含んだ褐色土が埋められていた。

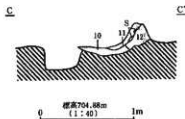
ピットはカマド西脇に1個検出できた。掘り方を掘り下げたところ8個のピットが確認できたがいづれが柱穴かは、判別しきれない。

カマドは北壁のやや東によって設置されていた。全体に壊れがひどいが、特に西側部分は攪乱によって原形をとどめていない。かろうじて東側の袖部が若干残存しており、住居掘り方を埋めた後カマド掘り方を暗褐色土で埋め、熔結凝灰岩の板状礫を芯材として構築されていたことが窺



標高704.88m
(1:80)
0 2m

- 1層 黒褐色土 10YR2/3 軽石(2-5cm大)を多く含む。
- 2層 褐色土 10YR4/4 軽石(2-5cm大)を多く含む。
- 3層 黒褐色土 10YR3/2
- 4層 黒褐色土 10YR2/3 床面直上に薄く埋積。
- 5層 褐色土 10YR4/4 周溝。
- 6層 褐色土 10YR4/4 粘床。
- 7層 黒褐色土: 10YR3/4 粘土、焼土を含む。
- 8層 黒褐色土 10YR3/2 粘床。
- 9層 褐色土: 10YR4/4 10YR7/4のブロックを多く含む床下の粘土。
- 10層 暗褐色土 10YR3/4 カマド掘り方の埋土。
- 11層 濃い赤褐色土 5YR4/3 粘土。
- 12層 濃い赤褐色土: 5YR4/3 粘土。



標高704.88m
(1:40)
0 1m

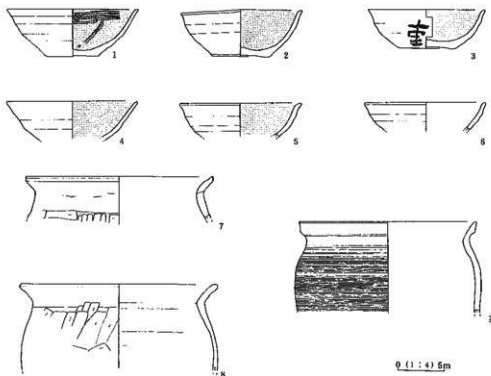
第15図 H4号住居址実測図



写真13 H4号住居址(南方から)



写真14 H4号住居址掘り方(南方から)



第16図 H4号住居址出土遺物実測図

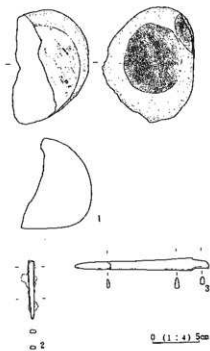
える。カマド掘り方の小ビットの存在からも芯材に礫が多く使われていたことが推定できる。

出土遺物には、土師器、鉄器、石器がある。須恵器は小片すらみえない。土師器には、坏・甕がある。

第16図1・4は1区、2・5はカマド内、6は1区掘り方、3は2区床面、7・9はカマド前面の床面、第17図2・3はカマド西脇の床面から出土している。第16図8はH5号住居址出土の破片と接合した。本住居址出土分はH5号住居址出土の破片の約1/9の大きさである。

土師器坏の底部はすべて回転糸切りである。1～5は内面黒色研磨されている。3は墨書がみえるが、判読不明の文字である。

8の土師器甕は頸部がくの字を呈し、焼成が良く



第17図 H4住居址出土遺物実測図

非常に焼きが堅い。9はカキ目状のロゴ調整痕をみせている。7はコの字状口縁の長胴甕である。

以上の土器の様相は、平安時代（9世紀末葉）の特徴をしめしている。

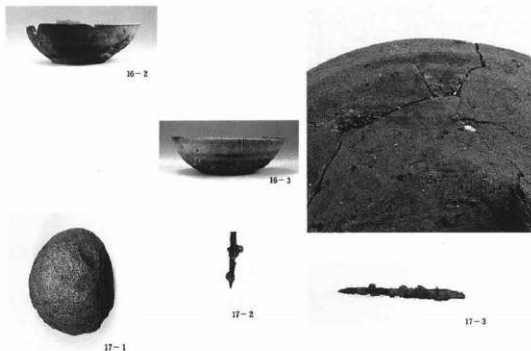


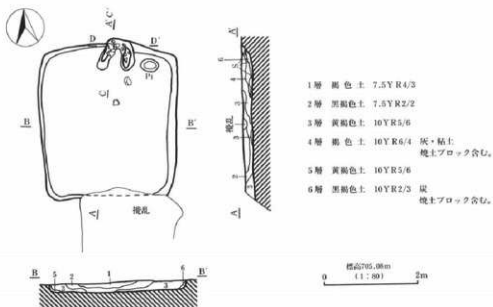
写真15 H4号住居址出土遺物

5 H5号住居址

本住居址は、けー10グリッドから検出された。南壁を最近のゴミ穴によって破壊されている。平面規模3.2m東西2.9m、平面形態は隅丸方形を呈する。壁残高は8.5cm～18.5cmを測る。カマドを中心とした主軸方位は、N-2°-Eを指す。床面はカマド周辺は堅緻であったが、他はそれほど堅くはない。床面下の掘り方は、みられなかった。

ピットはカマド東脇に1個検出され、東西36cm南北24cm深さ21cmを測る楕円形を呈する。

カマドは北壁中央に設置されていた。袖部が僅かに残存するのみでほとんど壊れていた。カマドの芯材には熔結凝灰岩が使用されており、東側袖部は構築土の褐色土に熔結凝灰岩が埋め込まれていた。西側袖部やカマド全面の床面上には、5個の熔結凝灰岩が散乱していた。カマド掘り方や煙道部には褐色土と橙色土が構築地として用いられていた。



第18図 H5号住居址実測図

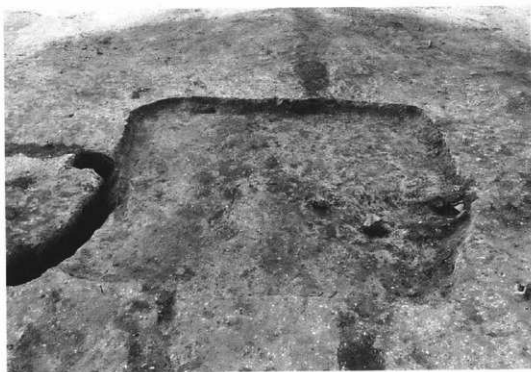
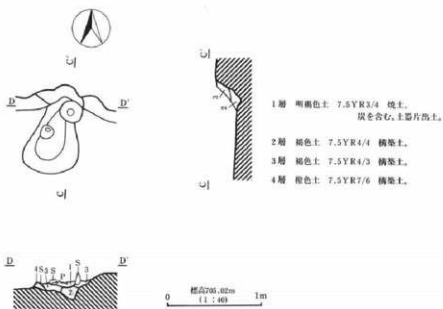


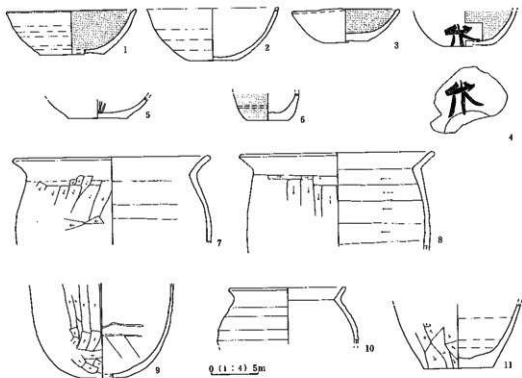
写真16 H5号住居址（南方から）



第1980 H5号住居址カマド実測図



写真17 H5号住居址カマド(南方から)



第20図 H5号住居址出土遺物実測図

出土遺物には、土師器坏・甕・小形甕、須恵器甕がある。須恵器坏は小片すらない。

第図2・3・9はカマド内、4はP1、5は1区2層、6は3区、8は2区、10はカマド東脇の床面上、11は2区床面上から出土した。7は1区2層・1区カマド東脇・床面上出土片が接合した。7の1/9片はH4号住居址から出土している。

土師器坏はすべてロクロ整形によるもので、内面黒色研磨がなされ回転糸切りの底部をもつもの（1・3・4）と内面黒色研磨されず底部が手持ちヘラケズリをされるもの（2・5）がある。4は「木」の墨書がみえる。

6の土師器はロクロ整形で外面が黒色研磨され、底部・内面とも黒色を呈する。底部はヘラケズリされている。

7・8は非常に焼きが強い土師器長胴甕で、頸部内面の屈曲が顕著である。外面には不明瞭な縦方向のヘラケズリがみえ、その後になでと押さえがうかがえる。10・11はロクロ整形による土師器甕で10の内面胴下部と底部には、ロクロ調整がよくみえる。

土師器ロクロ小形甕の存在などから、平安時代（9世紀末葉）であろうか。



20-3



20-11



20-7



20-4

写真18 H5号住居址出土遺物

6 H6号住居址

本住居址は、お・か-10・11グリッドから検出された。浅い耕作土が地山の浅間火山灰土にまで達しているため、かろうじて残存する床面と住居掘り方から遺構の範囲を把握した。

平面規模は南北約4.8m 東西約5.2mを測り、平面形態は東西に長い長方形を呈する。南北軸方向は、N-11' -Eを指す。僅かに残る覆土1層には、ほぼ全体に炭がみられた。

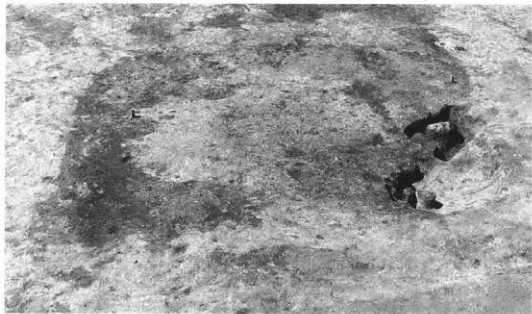


写真19 H6号住居址（東方より）

ビットは5個検出された。他に貼床下から11個のビットが確認された。P1・P2・P3・P4の主柱穴が南北1.8m・東西2.4mの長方形に配される。P1は径20cm深さ41cm、P2は長径30cm短径28cm深さ40cm、P3は径40cm深さ36.5cm、P4は径30cm深さ34cmを測る。P2内の床面下10cmに根石が置かれていた。床下から検出されたP8とP12は位置形状からP4以前の柱穴とも考えられる。P4の脇から検出されたP6には6個の小礫が詰まっていた。カマドに対する北壁東寄りからP5が検出された。ビット内の土層は、焼土・炭の互層がみられた。

カマドは、南東のコーナーに設置されていた。火床・燃焼部の焼土は厚く10cmを測り、地山にも焼け込みがみられた。住居の掘り方を黒色土で埋めた後、カマド掘り方を暗褐色土で埋めて火床の形状を整えている。床面の貼り床は、このカマド掘り方の埋め土の上にも及んでいる。

出土遺物には、土師器杯・羽釜、須恵器長頸壺、灰釉陶器碗・長頸壺、磨石がある。

第23図1の土師器羽釜・2の土師器杯はカマド、3の須恵器長頸壺は1区貼床下、4の磨石は4区貼床下から出土した。

出土遺物が少ないが、土師器羽釜・杯や南東コーナーのカマドの存在から、H1号住居址と同じく平安時代（10世紀後半代）に位置づけられよう。

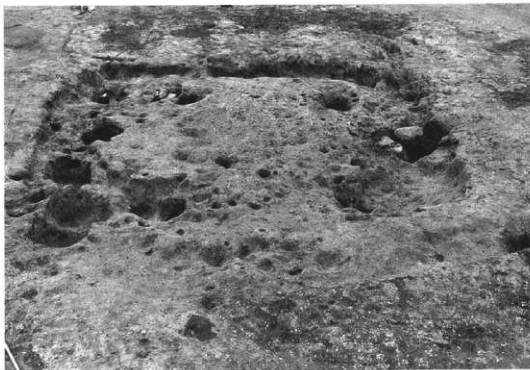
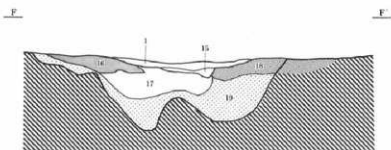
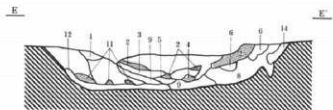


写真20 H6号住居址掘り方（東方から）

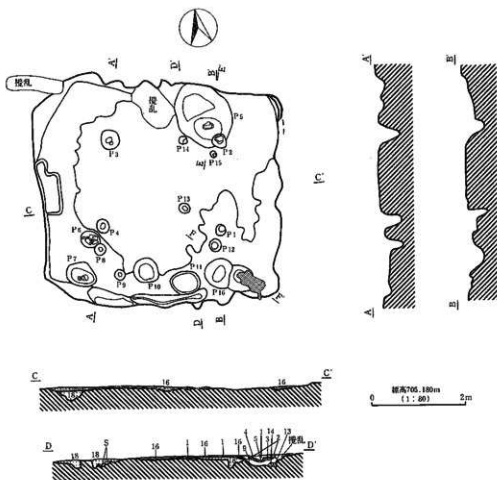


写真21 H6号住居址P5土層断面（東方から）



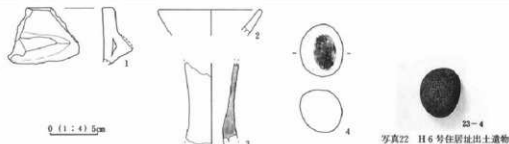
標高705.180m
 0 1m
 (1:50)

第21図 H6号住居址P5土層断面（東方から）



- | | |
|------------------------------|--|
| 1層 黒褐色土 7.5YR2/2 | 13層 褐色土 7.5YR4/4 |
| 2層 明褐色土 7.5YR5/8 焼土。 | 14層 濃い黄褐色土 10YR4/6 |
| 3層 明褐色土 7.5YR7/1 炭。 | 15層 黒褐色土 7.5YR2/2 炭。 |
| 4層 暗赤褐色土 7.5YR3/2 焼土。 | 16層 暗褐色土 7.5YR3/4 灰床。10YR4/6(に濃い黄褐色土)をブロック状に含む。堅い。 |
| 5層 明褐色土 7.5YR5/6 | 17層 暗褐色土 10YR3/4 カマド掘り方。10YR5/4(褐色土)の粘土ブロック多く含む。炭多く含む。 |
| 6層 黒褐色土 10YR2/3 | 18層 明赤褐色土 2.5YR5/8 焼土。 |
| 7層 褐色土 10YR4/4 | 19層 褐色土 7.5YR2/1 灰下層土。明黄褐色土をブロック状に含む。 |
| 8層 明褐色土 10YR3/4 | |
| 9層 褐色土 10YR4/6 | |
| 10層 暗褐色土 10YR3/3 | |
| 11層 赤褐色土 5YR4/6 焼土と灰(5YR6/1) | |
| 12層 灰白色土 5YR8/1 灰・炭。 | |

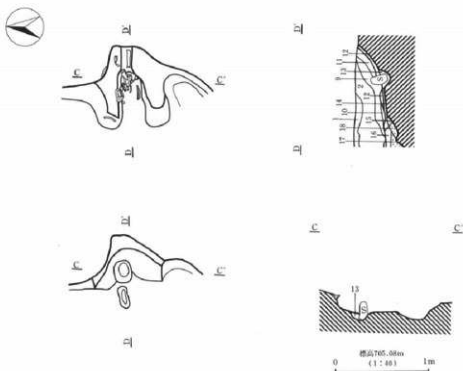
第22図 H6号住居址実測図



第23図 H6号住居址出土遺物実測図

7 H7号住居址

本住居址は、調査対象地内の南西隅け・こ-13・14から検出された。西壁と南壁の一部を攪乱により破壊されている。平面規模は南北3.4m 東西2.7mを測り、平面形態は南北に長い隅丸長方形を呈する。壁残高は、20~31cmを測る。カマドを中心とした主軸方位は、N-84°-Eを指す。床面は壁際が柔らかいが、全体に堅緻であった。中央が低くなり壁際が緩やかに高くなり、この部分が柔らかな床である。黒褐色を呈する覆土8層は床面直上に薄くみられるもので動物の



第24図 H7号住居址カマド実測図

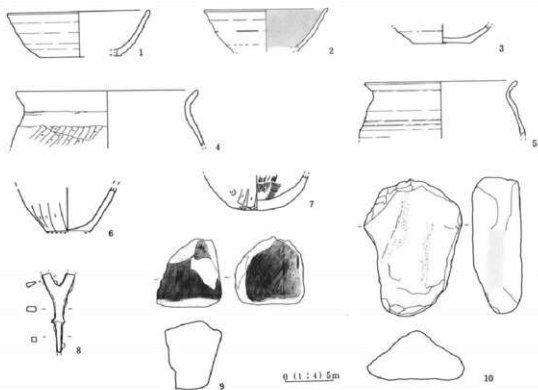
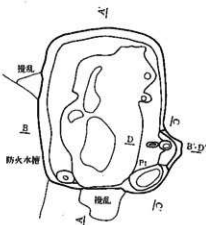
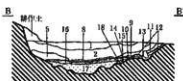
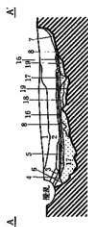
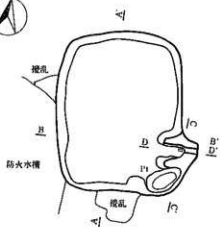


图25 80 H7号住居址实测图



写真23 H7号住居址カマド实测图



標高705.08m
0 (1:80) 2m

1層 黒褐色土 10YR3/2

2層 暗褐色土 10YR3/4 明黄褐色土(地山)と暗褐色土のブロックを多量に含む。人為的堆積と考えられる。

3層 黒褐色土 10YR3/2

4層 暗褐色土 10YR3/4

5層 暗褐色土 10YR2/3

6層 褐色土 10YR3/4

7層 暗褐色土 10YR3/4

8層 黒褐色土 10YR2/3

9層 黄褐色土 10YR5/6 カマド構築土のくずれ。焼土ブロック多量に含み、下部焼けている。上部には粘土がある。

10層 黒褐色土 10YR2/3 細かい炭を多量に含む。

11層 暗暗褐色赤土 2.5YR2/2 スズ状の炭化粒子量に含む。

12層 暗暗褐色土 7.5YR3/2 カマド構築土。

13層 暗赤褐色土 5YR3/3

14層 黄褐色土 10YR5/5

15層 黒褐色土 10YR2/3

16層 黒褐色土 7.5YR2/2 灰床、明褐色土をブロック状に含む。

17層 黒褐色土 7.5YR2/3 床下埋土。褐色土(7.5YR4/4)と黒褐色土(7.5YR2/2)に多い橙褐色土(5YR6/4)をブロック状に含む。

18層 明褐色土 7.5YR5/8 床下埋土に多い褐色土をブロック状に含む。軽石(10YR7/6明黄褐色)1-6cm大を多量に含む。

19層 濃い黄褐色土 10YR5/4 床下埋土。

第26図 H7号住居址実測図



写真24 H7号住居址（南方から）



写真25 H7号住居址掘り方（南方から）

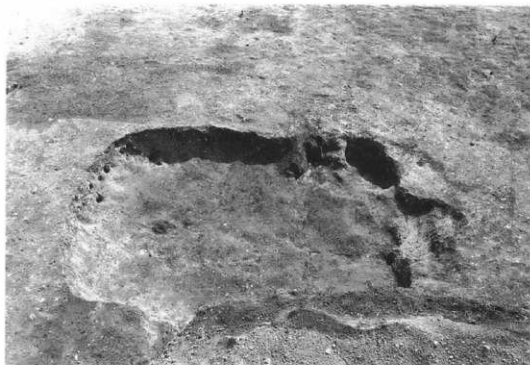


写真26 H7号住居址（西方から）



写真27 H7号住居址掘り方（東方から）



写真28 H7号住居址出土遺物

確認されなかった。P1は深さ10cmを測る。

カマドは東壁の南寄りに設置されていた。遺存状態は悪く火床と燃焼部がうかがえる程度であった。床面掘り方の埋土と貼床を切って、カマドの掘り方が掘られ、火床の形状や煙道の立ち上がり角度は、黒褐色土を用いて調整されていた。火床には熔結凝灰岩の支脚石が残されていた。これらの上部にみられる9層には、カマド構築土を構成していた黄褐色の粘土がみられる。両袖部にあたる位置には、10cm前後の熔結凝灰岩の平たい礫が散在していた。これらから、礫を芯として、粘土を含む構築土で覆ったカマドが推測できよう。

出土遺物は、土師器坏・甕、鉄鎌、磨石が図示できた。須恵器は小片すらみられない。

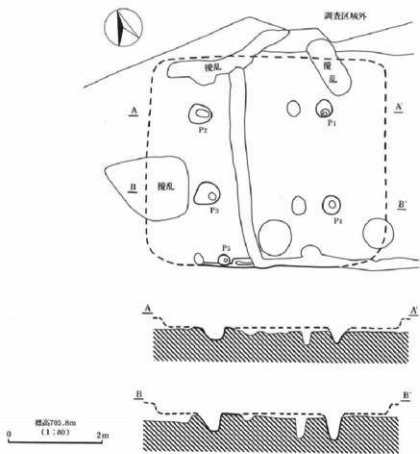
第25図1～8はすべてカマドからの出土であり、覆土1層～6層内からはほとんど出土していない。9・10は4区より出土。1～3は土師器坏で1・3は底部回転糸切りをみせている。4はコの字状口縁の土師器長胴甕、5はロクロ整形による土師器甕である。7は底部が丸みを帯び厚手の土師器甕である。8は雁股式の鉄鎌で残存長8.2cmを測り、両先端を欠いている。

コの字状口縁の土師器長胴甕、ロクロ整形の土師器甕の存在から平安時代（9世紀末葉）と思われる。

8 H8号住居址

本住居址はえー1・2グリッドから検出された。H1号住居址に中央から東側を破壊され、耕作が床面にまでおよんでおり、主柱穴と残存する南壁の一部からその存在を確認した。東西1.3m南北1mの長方形に配されるP1～P4から東西に長い長方形の平面形態が推定できる。4個の主柱穴は円形を呈し、それぞれ深さは30cm前後である。出土遺物はない。

存在が想定される。床面下の掘り方は壁際で5cm前後と浅く、中央から南壁にかけて20～30cmと深くなる。掘り方には黒褐色土・明褐色土にぶい黄褐色土が埋められていた。ピットはカマド南脇に1個検出された。他には床面下からも



第27図 H8号住居址実測図



写真29 H8号住居址(南方から)

佐久市埋蔵文化財調査報告書

- | | |
|-------------------------------|----------------------------|
| 第1集 【金井城跡】 | 第19集 【上芝宮遺跡】 |
| 第2集 【市内遺跡発掘調査報告書1990】 | 第20集 【下畑端遺跡Ⅲ】 |
| 第3集 【石附宮址Ⅲ】 | 第21集 【金井城跡Ⅲ】 |
| 第4集 【大ふけ遺跡】 | 第22集 【市内遺跡発掘調査報告書1991】 |
| 第5集 【立科F遺跡】 | 第23集 【南上中原・南下中原遺跡】 |
| 第6集 【上曾根遺跡】 | 第24集 【上畑端遺跡】 |
| 第7集 【三貫畑遺跡】 | 第25集 【上久保田Ⅳ】 |
| 第8集 【龍の下遺跡】 | 第26集 【藤塚古墳群・藤塚Ⅱ】 |
| 第9集 【国道141号線関係遺跡】 | 第27集 【上久保田Ⅲ】 |
| 第10集 【堀原遺跡Ⅱ】 | 第28集 【曾根新城Ⅴ】 |
| 第11集 【赤鹿畑外遺跡】 | 第29集 【山法師遺跡 B、筒村遺跡 B】 |
| 第12集 【岩宮遺跡Ⅱ】 | 第30集 【市内遺跡発掘調査報告書1992】 |
| 第13集 【上高山遺跡Ⅱ】 | 第31集 【山法師遺跡 A、筒村遺跡 A】 |
| 第14集 【栗毛坂遺跡】 | 第32集 【東ノ苗遺跡】 |
| 第15集 【野馬久保遺跡】 | 第33集 【堀原遺跡Ⅳ、下曾根遺跡Ⅰ、前藤部遺跡Ⅰ】 |
| 第16集 【石並城跡】 | 第34集 【西一本和遺跡Ⅰ】 |
| 第17集 【市内遺跡発掘調査報告書1991】（1月～3月） | 第35集 【市内遺跡発掘調査報告書1993】 |
| 第18集 【西曾根遺跡】 | |

佐久市埋蔵文化財調査報告書第36集

蛇塚B遺跡Ⅲ調査報告書

1995年3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒384-01 長野県佐久市大字中込3056

埋蔵文化財課

〒385 長野県佐久市大字志賀5953

TEL 0267-68-7321

印刷所 株式会社 佐久印刷所

